

sexual plants in the mean value of frond length.

d. All sorts of plants of the present species were absent from the locality on the 2nd of September, having been washed away before this date.

2. The annual yields of *Undaria pinnatifida* in Niigata Prefecture (Echigo Prov. & Sado Isl.) from 1951 to 1956 were proved from the available data to be in proportion to the total of sunshine hours from January to March of the corresponding years.

文 献

長谷川由雄・福原英司 (1952 及び 1955): クロバギンナンソウの生態学的研究, 第 1, 3 及び 5 報. 北水研報告, 3 号及び 12 号. 斎藤雄之助 (1956 及び 1958): ワカメの生態に関する研究, II 及び III. 日水会誌, 22 (4) 及び 22 (6, 7). 斎藤 譲 (1956): 越後能生及び附近沿岸産海藻目録. 北大水産彙報, 7 (2).

欧 洲 を 巡 り て (II)

瀬 木 紀 男

T. SEGI: My visit to Europe (II)

(3) 英国より和蘭へ

早くも 9 月となってロンドンに別れを告げ, KLM 機で僅か 1 時間余飛ぶとアムテルダム Schiphol 空港に着く。花で飾られた美しい空港ビルから街に向うと, 空気は澄み運河の水清く, 見渡す限り緑の平野が続き, 如何にもものんびりする。夜に入れば公園の木も建物も, 港に碇泊する船も, 特殊な照明の中に浮かび上がり, お伽の世界に来たようである。汽車でライデンに向う途中, 遠近に見られる大きな風車が如何にも和蘭らしい。Rijksherbarium に行くと KOSTER 女史, VAN DEN HOEK 氏が迎えてくれた。此処には SIEBOLD, SURINGAR, WEBER VAN BOSSE (Siboga Expedition), HAUCK, KÜTZING 等の標本が多く又米国の GARDNER, TAYLOR, HOLLENBERG 等の標本もあって, 本邦の藻類を研究する上に極めて重要な所である。特に此処で日本



コスター女史
(ライデン腊葉館前にて)

産の *Polysiphonia tapinocarpa* SURINGAR (和紙に標本作成), *P. fragilis* SURINGAR 等の type を調査し得て幸であった。腊葉室には白一色の標本箱がずらりと並ぶ。又各階の腊葉室入口には防火壁があり、標本及び書籍運搬用の小形エレベーターがあるのも面白かった。標本はアルファベット順に実によく整理されており、産地の大陸別によって夫々違った色のラベルがはられている。又 type は赤, duplicate は桃色と区別している。索引カードも非常に完備し、原文献から年号, Synonym に至る迄整然と書かれているのには感心した。この Herbarium は昼休み2時間閉鎖になり、午前午後各一回ずつお茶の時間があり、この時 KOSTER 女史の紹介で多くの学者達と会見出来た。

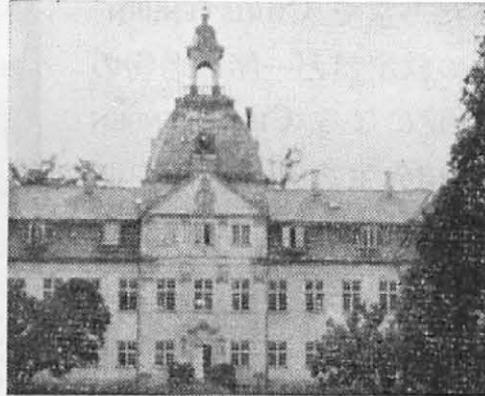
ライデンはとても落ち着いた町で、運河に沿った町並は一昔前の都市を思わせ、歩いていると本当に頭が休まる様だ。街には自転車の通学・通勤者が多い。折柄日本の版画・浮世絵展(江戸, 明治時代のもの)が Rijksmuseum で開かれており、又別館の自然科学館にはリンネの用いた採集道具や標本等多数の歴史展示物があった。

或夜 KOSTER 女史宅へ HOEK 氏夫妻と共に招かれた。玄関に仏像が飾られ、御自慢の庭園は暗くて見えなかったが、室内では色々な話題に花が咲いた。就中 HOEK 氏の口から異様な発音が“deshima”(長崎の出島)の話が出た時には、彼の日本に対する関心の程が窺われ、思わず微笑した。思えば和蘭は江戸鎖国の時代、日本が貿易を許した唯一の西欧国であった。

ライデン滞在最後の日、KOSTER 女史が大学内を案内してくれた。中世以来の伝統を持つ一角には、階段や廊下の壁一面に昔の学生の戯画が保存され、又嘗て此処に学んだ学生達のサインで、天井近く埋められている室もある。その中には小さなガラスでカバーし、記念に保存してあるものもあった(チャーチルのサイン等)。又は講堂正面はステンド・グラスで飾られていたが、その一部に日本の軍人を描いたものもあった。之は戦争を忘れない為にとの事であったが、今次大戦で蘭印を占領した事が、彼等の心を如何に刺戟したかと色々考えさせられる。又 Herbarium で日本の古書を見せてもらったが、本草綱目をはじめ江戸及び明治初期の植物に関する和綴の本及び巻物が数種類、虫にも喰われずよく保存されている。中には百年の昔、名古屋で出版された草木図説目録もあり、全く思いがけず懐しかった。最後に KOSTER 女史の研究室に行くと、その壁には多くの欧州藻類学者の写真が掲げてあった。

(4) 和蘭より丁抹へ

懐しい SAS 機で再び Schiphol 空港より飛び立ち、夕闇迫る頃有名な臨海実験所のある独逸ヘルゴランド島上空を通過し、出発後2時間にして待望久しきコペンハーゲンに着いた。期待通り、何如にも人情豊かな美しい都であった。ホテルに着くと既に LUND 博士の置手紙があり、間もなく歓迎

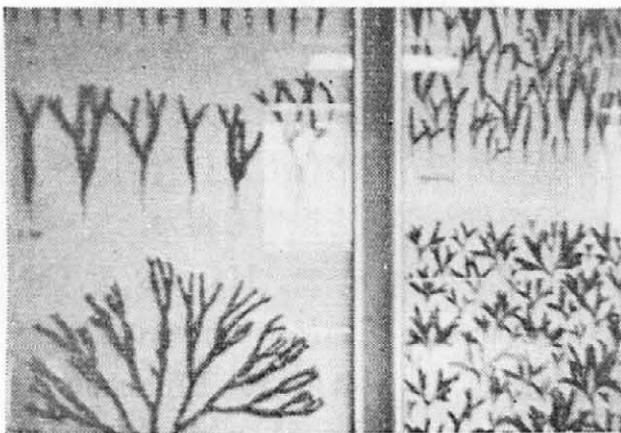


シャーロットテンルンド
水産研究所
(コペンハーゲン郊外)

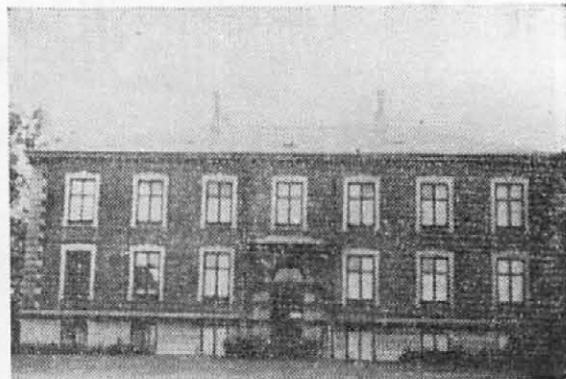


ルンド博士
(シャーロットテン
ルンド水産研究所
入口にて)

の電話がかかる。翌朝出迎えを受けて郊外のシャーロットテンルンドの水産研究所に行く。亭々たる巨木に包まれて眠った様に静かな森の中に、城を思わせるような研究所が立っている。所内を見学後、附属水族館に案内される。此所にはアフリカ産の電気鯰、グロテスクな黒い大鯰等が居り、又水槽の一室には遊泳する魚が全然居ずイソギンチャク・サンゴ等が色彩美しく配置されていた。又別館の展示会では、海藻関係として丁抹産海藻標本をはじめ、*Fucus* を成長順に実物によって示し



Fucus を成長順に展示したもの(右)
Fucus の単位面積に於ける密度を示したもの(左)
(何れも *Fucus* 本体を使用、シャー
ロットテンルンド水産研究所別館にて)



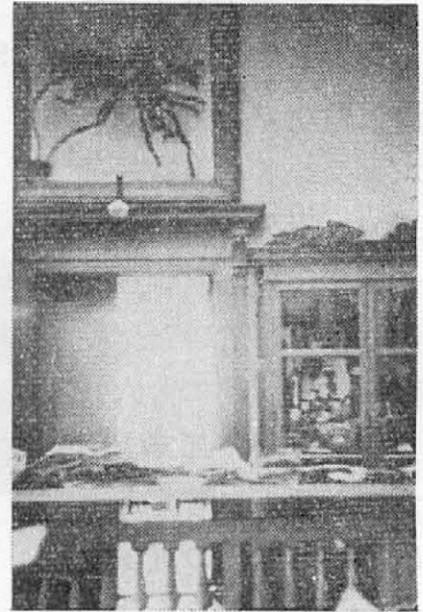
コペンハーゲン Botanical
Museum (植物園内にあり)

たものや、単位面積当りの成育数を之又実物によって示したものがあつた。此処から海岸迄も左程遠

くなく採集も行った。

此処の植物園研究室に行くと目下増改築中であつたが、出来上つた一室で CHRISTENSEN 氏、LANGE 教授その他の教室員と一緒に名物のスモレ・ブロードを御馳走になる。CHRISTENSEN 氏は、昨年来られた時田先生の想出話等をした。園内の Botanical Museum には、BÖRGESEN 氏の標本をはじめ多くの標本が丁抹、グリーンランド及び諸外国別に保存され、又廊下や階段の壁には *Laminaria digitata*, *Ecklonia buceinalis* 等数種の巨大標本を額に入れ展示してある。此処では日本にも産する *Polysiphonia kampsaxii* BÖRGESEN の type を中心として色々調べた。驚いた事には、小生が嘗て BÖRGESEN 氏に送った手紙類が一枚残らず保存され、又小生がモーリッシアス産の *Polysiphonia* を

査定した時の標本類も、一括して全部保存されていた。又 Inspector の HAGERUP 博士は色々と親密に話してくれ、標本や描画用の特殊鉛筆を記念

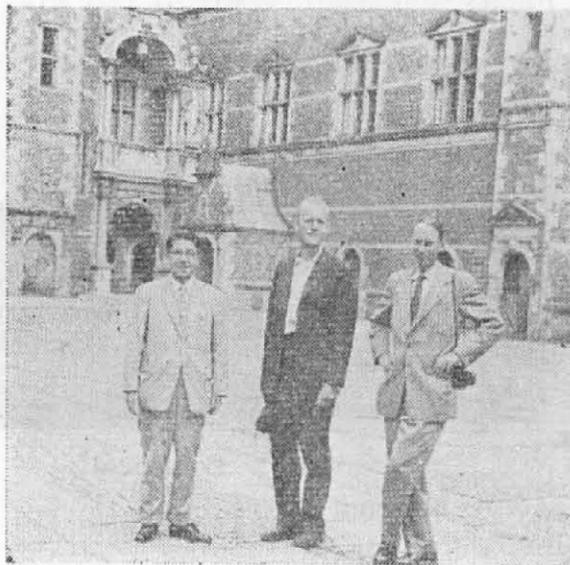


コペンハーゲン Botanical Museum 内部中央階段附近に掲げられた *Ecklonia buceinalis* の巨大標本 (左上)

に下さった。

折からコペンハーゲンの街はノルウェイの国旗一色に埋っていたが、之はこの国の王が来訪せられた為である。偶然にも王の行列に会い近距離から王を撮影し得た。

滞在中の一日、HANSEN 氏、CHRISTENSEN 氏の好意で大学の車を提供され、ヘルベックの BÖRGESEN 氏宅を訪れた。坦々たるドライブウェイを進む事約2時間、山中の Hillerod という処に、池に面したフレデックスボルグ城がある。夢の様に聳える壮大な城で、塔の辺からは美

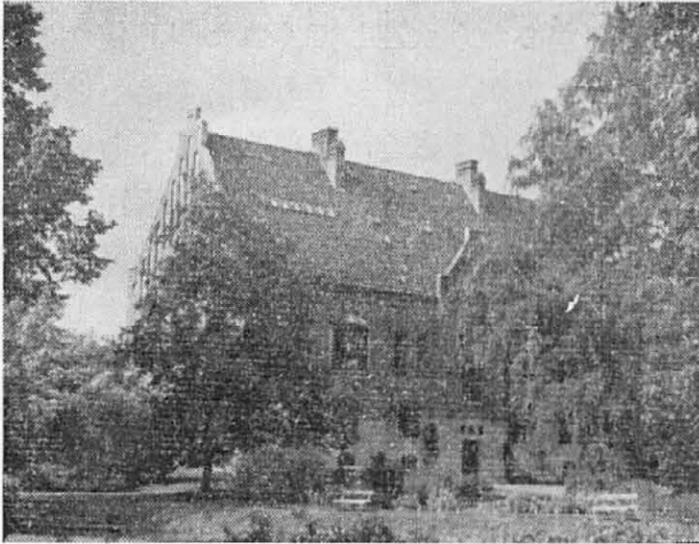


右端 ハンセン氏、中央 クリステンセン氏、左端 筆者
(フレデリックス・ボルグ城にて)

しい音楽が響いて来る。此処から更にドライブしていよいよヘルベックの BÖRGESSEN 氏宅に着く。未亡人と令嬢が心から歓迎してくれたが、僅かの違いで故人となられた博士に会えなかった事が、返す返すも残念であった。庭園は個人のものとしては此の国第一を誇り頗る広く、又植物の種類も多くメタセコイアまである。日本の石燈籠も池の傍にあり、附近一帯は東洋的な色彩が濃い(松、銀杏、竜胆等あり)。此所のゲスト・ブックには山田先生、ノルウェイ皇帝、同皇后、デンマークの前皇后等のサインがあり、小生もその一隅にサインし得た事は光栄であった。未亡人は BÖRGESSEN 博士と共に船でよく旅した事、博士が生前海とこの庭園をこよなく愛していた事、デンマークの前皇后もこの庭を愛されよく訪れられた事等を、静かに解り易い英語で話して下さる。此処は対岸の瑞典を指呼の間に望む景勝の地である。夕方名残を惜しみながら辞去し、ハムレットの舞台として有名なクロンボルグの城を訪れた。この城の石垣には珍しい地衣類がある由で、CHRISTENSEN 氏が指示した辺に黄色い夫らしき物があつたが、何しろ堀を隔てて高い処にある為、残念乍ら採集も出来なかつた。城の裏には大きな造船所があり、近代と中世の対照が如何にも面白く感じられた。コペンハーゲンには、アンデルセンを生んだお伽話の国の首府だけあつておっとりとした落ち着いた、色々の Museum や王城を見たが、フィッシュ・マーケットも特に印象に残つた。日本の魚市場と違い清潔で臭気がない点、計算機等が機械化されている点等が感じられた。

(5) 丁抹より瑞典へ

対岸の瑞典まで、岸に打ち寄せる海の波が見える程の低空を、9月14日の午後約20分間飛ぶ。着いてみるとこの国は如何にも平穩・平和で、学問の研究にふさわしい雰囲気であつた。夕方ルンドのホテルに着くと、既に KYLIN 夫人の置手紙があり、電話で明日の打合せをする。此処は静かな大学町、世界藻類学の発祥地とも言うべきルンドに、今居るかと思うと全く夢の様である。Museum の2階に AGARDH 父子の標本、又地下室の廊下に KYLIN 博士の標本が保存してあり、ビキニの標本も一室に纏められている。AGARDH の標本を見る時は希望の種名を記帳して PETERSON 氏に頼むと、大切そうに持って来てくれる。夜は勿論、昼食等で一寸外出する折も一々返却する。標本箱の上には J. AGARDH の金色の胸像が置かれてあつた。PETERSON 氏の好意で朝7時から夜8時過ぎ、研究室を開放してくれたので研究能率が上つた。



ルンドの Botanical Museum
(植物園内にあり)



シリン夫人 (ルンド Botanical
Museum 入口にて)

此処では多くの AGARDH 父子の古い標本, KYLIN の標本等の内特に日本と関係の深い *Polysiphonia*, *Gelidium* 等を調べ, 又問題の *Orcasia* を検鏡した。その内生枝は遂に確認し得なかったが, その傾向は観察された。又ナガシマモクの記載時比較した *Sargassum bractelosum* J. AGARDH を調べられたのは望外の喜びであった。植物園の構内には珍しい植物が沢山あったが殊にチリー原産の *Araucaria* 及び *Cercidiphyllum japonicum* が注目を惹いた。栗鼠が木から木へ走り移る姿を見かけるのも如何にも北欧らしい。又入口近くには AGARDH 会館 (嘗て AGARDH 父子が研究していた所で, 今は細胞分類学研究室及び Head Gardner のオフィス) があり, その前の暗い木蔭に C. AGARDH の胸像, 少し奥の池の辺に J. AGARDH の胸像があった。別棟には KYLIN の嘗て研究した研究所があり, 所長 BURSTROM 博士の案内で所内を見学したが, 現在は KYLIN の令息 ANDERS KYLIN 氏が植物生理を研究しており, 夫人の話によると故博士とそっくりの顔であるという。此処の講義室には KYLIN の肖像画があり, その前で夫人は生前の博士の思い出を夢みる様な瞳で色々語った。又此処には緑藻の pigment の研究をしているノルウェイの HALLDAL 氏が居られ, 又植物ホルモン研究室は如何にもフレッシュな感じであった。Museum の裏側の壁には 1917 年 Greenland の遠征をした Dr. T. WUEFF の記念板がはめこんであった。又植物園の近くの墓地にモニュメントを思わせるような立派な C. AGARDH の墓があった。PETERSON

氏の話によると、彼は海藻学者であると同時にこの地区の Bishop であり、銀行家であり、又この植物園創始者でもあったと言う。大学本部へ行くと、講堂には此処出身の有名人の肖像画が多数飾られ、AGARDH 父子の肖像もあった。又入口に日本の柔道講習の大きな張紙があった事も、思いかけなく注目された。

夜は創立 500 年と言う古い Stäket レストラン (壁に昔の物々しい銃剣等が飾ってある) で歓迎晩餐会を開いてくれた。KYLIN 夫人及び令息、PETERSON 夫妻、HALLDAL 氏が集り、蠟燭の火の下で Swedish rhapsody の静かな奏楽を聞きながら秋の夜長を楽しんだ。

思い出多いルンドを後にして、再び Malmö 空港からストックホルムに向う。夜になってこの街に近づくと、何と美しい事であろう。機上から見ると住宅の灯が宛も螢の様に輝き、五色の光芒交錯する中を Bromma 空港に着陸した。此処は如何にも豊かな国を思わせ、20 階以上もある宏壮な学生寄宿舎、北方民族博物館、生物博物館、野外大博物館スカンセン等を訪れたが郊外の自然美は又特に美しかった。

此処から汽車に 1 時間程乗って、この国最古(大学は 1477 年創立)最大の大学町として有名なウプサラに行く。此処の植物園の一室には、待望のアサクサノリの type が保存してある。ELIAS MELIN 博士の御世話で、SKUJA 博士の研究室でこの標本を精査した(詳細は後日別報予定)。1807 年完工した植物学教室は、正面から見ると恰もギリシア神殿を思わせる巨大なドリア式円柱が立ち並び、変った建物であった。半分は室内植物栽培場、半分は腊葉館になり、又所謂 Linnaean Hall がある。SANTESON 氏の案内で此処に保存されている THUNBERG の日本近海産 *Sargassum thunbergii* O. KUNTZE, *Sargassum enerve* C. AGARDH 等の標本を主に検べた。昼休みに園内を歩いてみると、*Campamula*, *Saxifraga* 等の多くの植物が、大きな擂鉢状の穴の中に生育し、又 *Picea* の壮大な並木が続いて、遙かにウプサラ城を望む風景等忘れ得ぬ印象を受けた。(続く) (三重県立大学水産学部)

学 会 録 事

評議員選挙開票結果

去る 5 月末日をもつて本会評議員選挙を終へ、6 月 5 日に開票いたしましたところ